

対人的好悪感情と対人認知の関連について¹⁾

水野邦夫

態度研究においては、態度が感情、認知、行動の3つの成分から構成されることが指摘されており、これらの成分は相互依存的で一貫性が高いとされている (Rosenberg & Hovland, 1960 ; Krech, Crutchfield, & Ballachey, 1962)。このことは対人関係における態度についても同様であり、特に対人感情と対人認知の間には一貫した関係があると考えられる (林, 1989)。対人感情のなかで最も一般的かつ中心的な次元に好嫌 (Liking-Disliking) があるが、われわれは日常生活において、「あばたもえくぼ」、「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」などのことわざにみられるように、しばしば対人的好悪感情と対人認知を関連づける傾向があるようである。またある人物に対する1、2の好ましいもしくは悪い印象が、その人物の全体的評価を不当によくあるいは悪くしてしまう傾向 (ハロー効果) があることもよく知られている。

好悪感情と対人認知の関連をみた研究として、たとえば Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) は、好ましいと思っている相手は自己像や自己の理想像に類似して認知される傾向があることを見出している。また Regen, Straus, & Fazio (1974) は、対象人物の向社会的行動について、その人物への好悪感情の違いによって行為の帰属が異なるという結果を得ている。さらに楠見 (1989) は、中学生を対象に行ったソシオメトリック調査で、5ヶ月前と比べて関係が疎遠になった (すなわち相手に対して感情的にネガティブになっていると考えられる) ペアでは、相手のことを自分勝手な人であると思う傾向が強まることを報告している。このように、われわれの一般的・日常的理解においても、また実証的な研究結果においても対人的好悪感情と対人認知の対応性は十分に認められるところであろう。

1) 本研究のデータは、日本感情心理学会第6回大会 (於 北星学園大学) および第7回大会 (於 文京女子大学) において口頭・パネル発表された。

ところで、好悪感情は基本的に1次元（快—不快）であると考えられるので、これが対人認知と対応するのであれば、たとえば好きな人を「誠実な」と認知すれば嫌いな人は「狡猾な」というように、好意感情を持つ人物に対する認知と嫌悪感情をもつ人物に対する認知は正反対になることが予測される。しかし、パーソナリティだけを考えてもさまざまな特性や認知次元が存在するため、実際にはすべてが正反対に認知されるわけではないであろう。それでは、好意感情、嫌悪感情を持つ人物に対する諸特性や次元の認知はどのように異なる（あるいは一致する）のであろうか。本研究では、この点を明らかにすることを主目的とした。

ここで、上記の目的を検討するにあたって、膨大な数に上るとされる諸特性（もしくは次元）の認知を比較的容易に、すなわち認知者が負担にならない程度に対象人物の諸側面を評定できる手法を用いるべきであろう。そのためには諸特性がある程度集約された尺度もしくはリストが必要になる。そこで、水野（1995 a）は対人行動の円環モデル（Freedman, Leary, Ossorio, & Coffey, 1951 ; Foa, 1961 ; Wiggins, 1979 ; 今川・津村・大坊・林, 1984 ; 戸狩, 1977）に基づき、代表的な15（ただし水野（1995 b）では、さらに1語追加して16としている）の対人行動特性形容語を抽出している。これは膨大な数の対人行動を16種にまで集約していることになり、対人認知（厳密には対人行動の認知になるが、パーソナリティ認知などの代用として用いても差し支えはないであろう）の諸側面の測定には適していると思われる。また、水野（1994）および Midzuno（1996 a）はこれらの形容語を用いて、「初対面の人」、「親友」、「いわゆる人あたりのよい人」、「いわゆる信頼できる人」、「いわゆる自己主張する人」に対する認知を調べているが、いずれの人物についてもその行動特性を周期関数的に表現しうることを見出している（図1参照）。このことは、さまざまなタイプの人物の対人行動の認知が次式で表現できる可能性を示唆しているといえよう。

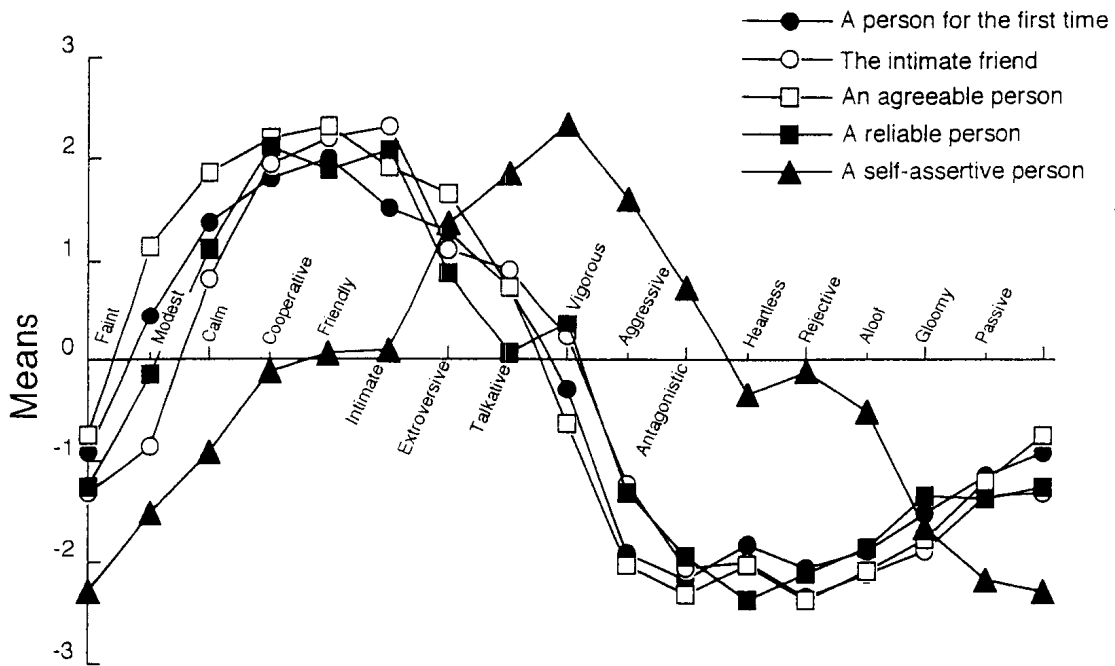


図1 各人物の対人認知評定

$$Y = a \cdot \sin(X + \delta) + e$$

註

Y : 各対人行動特性の認知量 (評定値)。

a : 周期グラフの振幅。この値は対人行動特性の評定を何段階で行うかによって異なってくる。因みに Midzuno (1996 a) は 7 段階評定尺度を用いており、 $a \doteq 2.0$ という値を得ている。

X : 対人行動特性 (例えば、友好的な、気の強い、など) を角度で表現したもの (円環モデルによれば、すべての行動特性は円環上に布置されるので、起点からの位置を角度で表現することが可能である)。なお先の対人行動特性は理論的には 22.5° の幅で等間隔に布置することになる。

δ : 人物のタイプによる変化値。たとえば Midzuno (1996 a) は「信頼できる人」の回帰式 $Y = 2.066 \sin X - 0.325$ に対し、「自己主張する人」 $Y = 1.838 \sin(X - \pi/2) - 0.098$ の式を得ている。

e : 認知量の理論値との誤差。

この手法を用いれば、好意感情もしくは嫌悪感情を持つ人に対する認知の様相や相違・類似点を比較的容易に把握することができると思われる。そこで本研究では、この手法に基づき、対人的好悪感情と対人認知の関連を調べてゆくことにする。

研究 1

対人認知は対人相互作用の中でなされるものであり、認知者と被認知者が日常的に相互作用をしている場合、認知者の要因、被認知者の要因以外に両者の相互作用の要因という観点も考慮する必要がある。今回はモデルの簡易性を考慮して、相互作用要因を捨象するために、認知者が被認知者のことを知りつつも、両者が実際に相互作用を行う可能性が低いと思われる、好きな芸能人、嫌いな芸能人の認知をもとに、対人的好悪感情と対人認知の関係を調べた。

方 法

被調査者 京都府内の女子短期大学の学生で、心理学の講義の受講者に調査への協力を依頼したところ、最終的に128名がこれに応じた。

手 続 き 被調査者に対し、好きな芸能人・嫌いな芸能人を男女各1名ずつ想起させ、その人物がふだん、水野（1995 a, 1995 b）の16の対人行動特性をどの程度行うと思うかを、1（あてはまらない）から7（あてはまる）までの7段階で評定させた。

結 果

認知された行動特性のグラフ化 好き嫌いかつ男女別に、各対人行動特性の評定値についてその平均を求めた。水野（1994）および Midzuno（1996 a）に倣い、その結果を図2に示す。好きな場合、嫌いな場合のいずれにおいても、被認知者の性別によって若干の違いがみられるが、全般的に顕著な差はみられないようである。また好きな芸能人の場合には、特性によって評定値

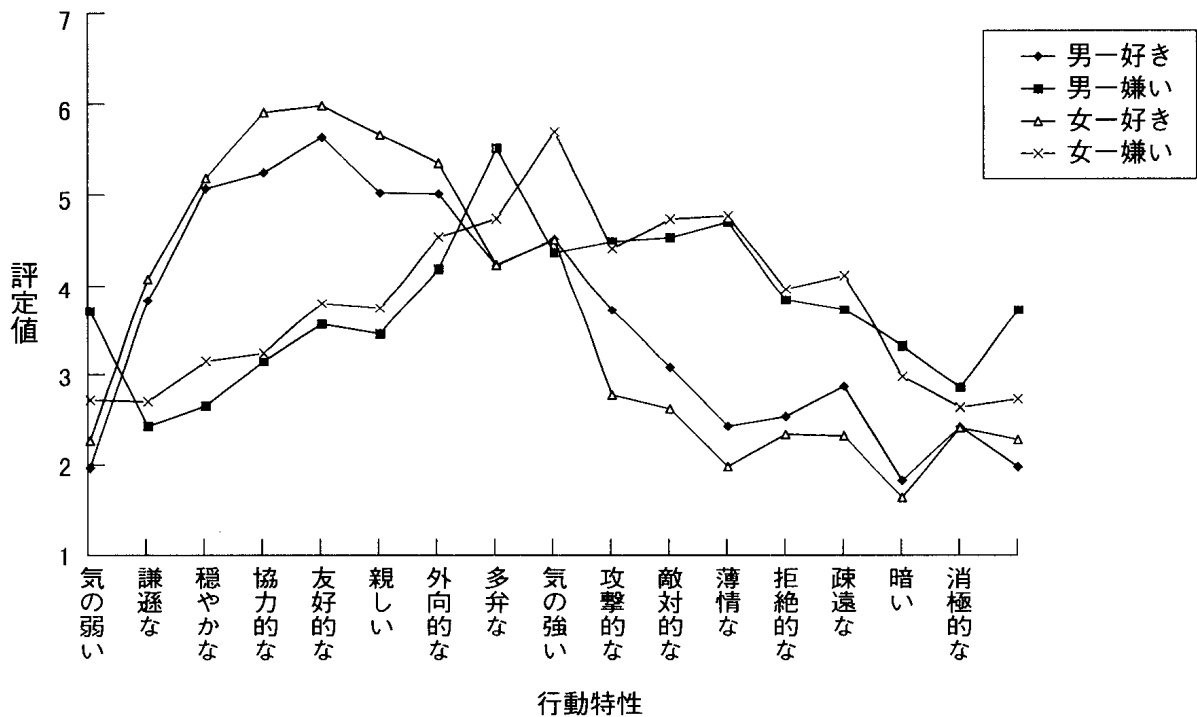


図2 対人行動特性の平均評定（認知）値

にかなりの差がみられるが、嫌いな芸能人の場合にはそれに比べると大きな差がみられないという特徴が認められる。また好き-嫌いのグラフが交差している点、すなわち被認知者への好悪に関わらず評定値（認知）にあまり差がみられない点は、「外向的な-多弁な」および「気の弱い-謙遜な」の中間点であった。また「消極的な」でも各被認知者の評定値が近接しているのがわかる。この結果から、向性（外向-内向）に関する認知は対人的好悪感情の影響を受けていないことが示唆される。

回帰方程式の算出 Midzuno (1996 a) は各対人行動特性の理論値（角度）を正弦変換した値を説明変数、各対人行動特性の平均評定値を基準変数とした単回帰分析を行っており、相当に高い説明率 ($89.83 \leq R^2\% \leq 95.62$) を得ている。本研究もそれに倣い、各被認知者のグラフの回帰方程式を算出した。なお算出にあたっては、Midzuno (1996 a) と同様に、各対人行動特性について「気の弱い」を 0° とし、以下「謙遜な」、「おだやかな」…の方向で 22.5° ずつ加算した理論値を説明変数に、各対人行動特性の平均評定値を基準変数とした。方程式の結果、説明率および式の有意性を表1に示す。

表1 各被認知者の回帰方程式

好きな場合	嫌いな場合
<p><男性></p> $y = 1.083 \sin(x - \pi/8) - .183$ $R^2 \% = 19.79 +$	<p><男性></p> $y = -.635 \sin(x + \pi/4) + .091$ $R^2 \% = 26.76 *$
<p><女性></p> $y = 1.167 \sin(x - \pi/8) - .061$ $R^2 \% = 16.90$	<p><女性></p> $y = -.407 \sin(x + \pi/2) + .169$ $R^2 \% = 10.51$
<p><総合(男女込み)></p> $y = 1.289 \sin x - .422$ $R^2 \% = 24.23 +$	<p><総合(男女込み)></p> $y = -.560 \sin(x + 3\pi/8) + .140$ $R^2 \% = 23.06 +$

註: * $p < .05$, + $p < .10$

好きな被認知者と嫌いな被認知者とで比較すると、まず振幅（先の式における a の部分）は、好きな場合と嫌いな場合とでは符号が逆になっており、対人感情の好悪によって諸特性の認知が反対になる傾向が窺える。しかしながら、振幅の絶対値をみると、好きな場合は嫌いな場合の2倍近くの値を有しており、好きな場合と嫌いな場合とでは認知が全くの正反対にはならず、嫌いな場合の方が諸特性の認知が均等化している傾向にあるといえよう。また、各方程式の有意性は概して低く、Midzuno (1996 a) と違って、説明率も30%にすら達しておらず、モデルの適合性は相当に低いといえよう。

考 察

今回の調査は、対人相互作用的要因を捨象するために、被認知者を芸能人として対人好悪感情と対人認知の関係を調べたが、そこにはいくつかの特徴が認められた。まず第一に、好きな人物と嫌いな人物に対する認知は相反する傾向があるが対称的ではなく、特に、嫌いな人物の場合には各対人行動特性の認知が均等化される傾向が見出された。これについてはいくつかのことが考えられる。そのひとつとして、被認知者に対して嫌悪感情を抱いても、結局は彼らが芸能人であり、直接相互作用を持つ可能性が基本的にないので

利害関係がなく、結果的に被認知者に関心を向けることがないことで、認知がおざなりになってしまっているということが考えられる。また、嫌いな人物をあからさまに悪く評価すれば、逆に認知者の方が「大人げない」などと評価されるおそれが生じ、それゆえに嫌いな人物に対しては、比較的冷静な認知（あるいは当たり障りのない回答）をしているとも考えられよう。

次に、好きな人物・嫌いな人物に対する認知は、向性に関する特性では評定に大きな違いがみられなかった。このことは、かかる特性が対人的好悪感情に影響しないことを表していると考えられる。同様のことは水野（1994）でもみられるが、この点については、研究2の結果とともに改めて考察する。

さらに、回帰方程式の適合度が Midzuno（1996 a）の場合と比べて相当に低いという結果にもなっている。これについても判然とした原因はわからないが、水野（1995 b）でも指摘されているように、形容語の意味がやや難解であることなども一因として考えられるかもしれない。この点も今後の検討課題であるといえよう。

研 究 2

研究1では、直接的に対人相互作用をすることのない芸能人を被認知者として調査を行ったが、本研究では、好悪感情を持つ対象でなおかつ実際に相互作用を有する者（身近な人物）に対する認知について調べ、さらに自己認知との関連についても検討した。

方 法

被調査者 大阪府内の看護学校学生および滋賀県内の短期大学学生の計84名（男子17名、女子67名）に対し、調査への協力を求めた。

手 続 き 被調査者に対し、水野（1995 a, 1995 b）の16の対人行動特性について自己・好きな人物・嫌いな人物（なお、後者2つは身近な人物を想起させた）がそれぞれどの程度行うかを1（あてはまらない）から7（あてはまる）までの7段階（1～7点）で評定させた。

結 果

行動特性のグラフ化 自己・好きな人物・嫌いな人物の3者それぞれの行動特性の平均評定値をグラフ化したものを図3に示す。3つのグラフの形をみると、自己と好きな人物については形が比較的類似しているが、嫌いな人物のそれはかなり異なっているのがわかる。また研究1と同様、嫌いな人物における各行動特性の評定値は、好きなもしくは自己のそれと比べて均等化される傾向が窺える。さらに各グラフの交差する点を見ると、「多弁な—気の強い」と「暗い—消極的な—気の弱い」であり、これも研究1とかなり類似した結果となっている。

行動特性の因子分析 次に、3者それぞれの評定値（16×3項目）について因子分析（主因子解、Varimax回転）を行った。なお、水野（1995c, 1996b）や解釈可能性等を考慮して因子数は4因子に指定して分析を行った。その結果を表2に示す。表2より、第1因子には自己と好きな人物の行動特性が高く負荷しているが、第2因子以降は主に嫌いな人物のそれが高く負荷しているのがわかる。このことから、自己認知と好きな人物の認知は比較的類似して捉えられるのに対し、嫌いな人物の認知はそれらとは異なっている

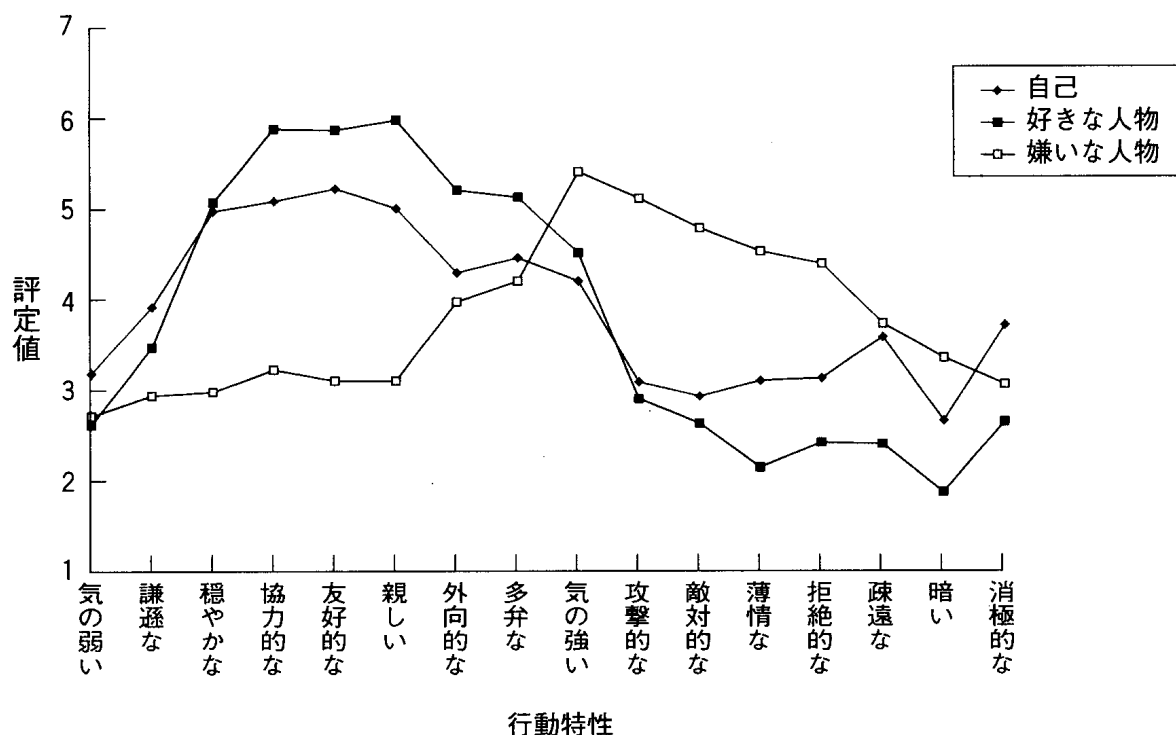


図3 3者の平均評定（認知）値

表2 3者の行動特性についての因子分析

項目\因子	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
S拒絶的な	.673	-.061	.073	-.127
S暗い	.659	.205	.199	.106
L薄情な	.646	-.019	.059	.070
L疎遠な	.642	-.023	-.006	.175
S攻撃的な	.620	-.269	-.199	-.108
L暗い	.601	.187	.052	.223
L拒絶的な	.588	-.323	.208	-.006
S気の弱い	.531	-.083	-.040	.036
S薄情な	.528	-.216	.062	-.207
S敵対的な	.509	-.160	-.101	.089
L攻撃的な	.477	-.280	.022	.167
S疎遠な	.470	-.069	-.039	-.213
L敵対的な	.439	-.103	.099	.355
L気の弱な	.431	.271	.307	.241
S消極的な	.382	.153	-.004	-.182
L親しい	-.340	-.010	.009	.004
S協力的な	-.343	.165	.208	-.063
S外向的な	-.397	.003	.099	.257
L多弁な	-.407	-.054	-.175	.221
S親しい	-.442	-.054	.054	.107
L外向的な	-.456	-.064	.109	.110
L協力的な	-.503	.047	-.045	-.289
S友好的な	-.586	-.041	-.042	.274
L友好的な	-.647	.142	.051	-.086
D敵対的な	.057	.707	-.015	.116
D多弁な	.322	.620	.311	-.148
D攻撃的な	.016	.602	-.220	-.052
D薄情な	.157	.597	-.206	.234
L消極的な	.410	.504	.142	-.068
D気の強い	.205	.452	-.292	-.278
L穏やかな	.214	.444	.127	.013
S謙遜な	.062	.383	.351	.040
L謙遜な	.332	.349	.260	.067
L気の強い	.004	-.292	-.109	.109
D穏やかな	.140	-.530	.387	.261
D親しい	.084	-.140	.793	-.039
D協力的な	.026	-.097	.720	-.029
D友好的な	.172	.044	.597	.009
S穏やかな	.265	.180	.374	.206
D外向的な	.142	.171	.287	-.148
S気の強い	.126	-.110	-.196	-.121
D拒絶的な	.244	.244	-.504	.350
D消極的な	.015	-.171	.046	.695
D謙遜な	.199	-.214	.056	.689
D暗い	.208	.136	-.249	.621
D疎遠な	.076	.213	-.069	.471
D気の弱い	.043	.001	.267	.415
S多弁な	.214	-.165	-.129	.333
寄与	7.436	3.815	3.202	3.088

註：S…自己 L…好きな人物 D…嫌いな人物の行動特性を表す。
 ゴシック太字は因子負荷量±.40以上または以下を表す。

のが窺える。また好きな人物の特性と嫌いな人物のそれが、それぞれ別の因子に高く負荷していることから、好きな人物と嫌いな人物の認知は正反対ではないことも窺えよう。さらに、嫌いな人物の行動特性が第2因子から第4因子に分かれて高く負荷していることから、嫌いな人物に対する認知はより複雑な構造を有していることが示唆される。

好悪に影響する行動特性 つづいて、各被調査者が評定した3者の行動特性データを込みにして（すなわち自己、好きな人物、嫌いな人物を別々の（被調査者の3倍の）データとして）、因子分析（手法は先と同様）を行った。なお因子数は、解釈可能性を考慮し、かつ水野（1995 a）や水野（1998）を参考にして、2因子に指定した。その結果を表3に示す。表3より、第1因子は「攻撃的な」、「薄情な」、「拒絶的な」などが正に高く、「協力的な」、「友好的な」、「親しい」などが負に高く負荷していることから、「敵意—受容」の因子と解釈できよう。一方第2因子は、「謙遜な」、「気の弱い」が正に、「多弁な」、「外向的な」が負にそれぞれ高く負荷していることから、「内向—外向」の因子と解釈できよう。

そこで、各因子の因子得点を説明変数、人物に対する好悪（自己認知のデータを除外した後、好きな人物=1、嫌いな人物=0のダミー変数を代入）を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、重相関係数の値は有意に高く（ $R = .779, p < .001$ ）、また標準偏回帰係数は敵意—受容のみが有意であり（ $\beta = -.760, p < .001$ ）、内向—外向は有意ではなかった（ $\beta =$

表3 行動特性についての因子分析

項目\因子名	敵意—受容	内向—外向
攻撃的な	.763	-.068
薄情な	.733	.193
拒絶的な	.683	.285
敵対的な	.669	-.011
気の強い	.520	-.436
穏やかな	-.736	.254
親しい	-.739	-.181
友好的な	-.744	-.218
協力的な	-.762	-.152
消極的な	-.020	.774
暗い	.473	.578
謙遜な	-.230	.539
気の弱い	.014	.489
疎遠な	.386	.466
外向的な	-.325	-.418
多弁な	-.147	-.444
寄与	5.078	2.532

註：太字は±.40以上または以下を表す。

- .075, *ns*)。このことから、人物に対する好悪感情には、その敵意—受容的態度が強く影響しており、向性（内向—外向）はほとんど影響しないことが窺える。

考 察

本研究では、被認知者を認知者と相互作用を持つ人物（身近な人物）にしたうえで、研究1と同様に、好きな人物・嫌いな人物の認知の差異を調べ、さらに自己認知との関係についても検討を行った。その結果、自己認知と好きな人物に対する認知は類似する傾向にあるのに対し、嫌いな人物はそれらとは別の認知がなされるという結果となった。これは Fiedler et al. (1952) の結果とも合致しており、また好嫌によって認知が必ずしも正反対とならず、嫌いな人物への認知がそれほど極端にならない点は、研究1と合致している。研究1では、この原因のひとつとして、被認知者が、認知者と身近に接することがなく直接的な利害関係がほとんどない人物（すなわち芸能人）であることを挙げたが、利害関係のある人物についても同様な結果がみられたことから、むしろ嫌いな人物を極端に悪く認知することに対する社会的評価（「大人げない」などと非難されるなど）を考慮している可能性の方が大きいと考えられよう。また、好きな人物（自己も）に対する認知と嫌いな人物に対するそれが別の次元にあることは、好悪感情の一次元性に対し、認知はより複雑であり得ることを示していると思われる。齋藤（1980）は対人行動の円環モデルをもとに、対人感情についても同様のモデルを作成している。これを見ると、好悪と優劣の次元を軸にさまざまな対人感情が想定されている。今後はこれらの対人感情と対人認知の対応関係に着目していく必要もあろう。

次に、敵意—受容の認知が好悪感情に大きく影響する結果となっているが、これはごく当然の結果であるといえよう。しかし内向—外向の影響がほとんどみられなかったことは、研究1の結果や水野（1998）などとも合致しており、世間一般に言われるような、「外向＝好印象、内向＝悪印象」という構図は必ずしも妥当でないことが示唆される。向性が好悪感情に影響されない

原因としては、向性が顕在的行動として観察しやすく、感情の如何によって修正することができないほど明確であるためであると考えられる。しかし大橋・平林・小川・鹿内・林・吉田・津村（1978）は、同様の仮説を呈しながら、それを支持するデータを得ていない。この点についてはさらに検討する必要がある。

ところで、外向性が好感度と関係することはわれわれが一般的に考えることであり、また松井・江崎・山本（1983）もそれを裏づける結果を得ているが、今回の結果はそれとは相反するものである。水野（1996c, 1997）は柔軟な対人関係における外向性の役割について懐疑的な立場を示しており、また水野（1998）は対人関係における外向性の役割は、関係開始のための橋渡しの役にすぎないのではないかと考察している。対人関係における外向性の役割は、改めて検討すべき問題であるといえよう。

引用文献

- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 790-796.
- Foa, U. G. 1961 Convergences in the analysis of the structure of interpersonal behavior. *Psychological Review*, **68**, 341-353.
- Freedman, M. B., Leary, T. F., Ossorio, A. G., & Coffey, H. S. 1951 The interpersonal dimension of personality. *Journal of Personality*, **20**, 143-161.
- 林 文俊 1989 対人認知 第4節パースペクティブ 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編）社会心理学パースペクティブ1 誠信書房 Pp. 34-40.
- 今川民雄・津村俊充・大坊郁夫・林 文俊 1984 対人的オリエンテーションの研究(3)－対人行動の構造について－日本心理学会第48回大会発表論文集, 663.
- Krech, D., Crutchfield, R. S., & Ballachey, E. L. 1962 *Individual in society*. New York : McGraw - Hill.

- 楠見幸子 1989 二者関係における選択パターンおよびその変化と心理的特性の相互理解との関連 心理学研究, **60**, 9-16.
- 松井 豊・江崎 修・山本真理子 1983 魅力を感じる異性像—同性の推測と実際とのズレ— 日本社会心理学会第24回大会発表論文集, 44-45.
- 水野邦夫 1994 対人関係における対象の行動パターンの諸様相 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 294-295.
- 水野邦夫 1995 a 対人行動の構造の円環性の検討と機能的柔軟性指標 (F F I) の作成 社会心理学研究, **10**, 114-122.
- 水野邦夫 1995 b 機能的柔軟性指標 (F F I) に関する研究—妥当性・性格特性との関連・表現について 同志社心理, **41**, 1-8.
- 水野邦夫 1995 c 「人当たりのよい人」のイメージおよび特徴について 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, 244-245.
- Midzuno, K. 1996a A model predicting cognition of interpersonal behaviours. *26th International Congress of Psychology (Internatinal Journal of Psychology, 31, 67.)*
- 水野邦夫 1996 b 交際期間の長さが人当たりのよさの認知に及ぼす効果 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 264-265.
- 水野邦夫 1996 c 外向者は対人関係を柔軟に処理できるか 同志社心理, **42**, 23-31.
- 水野邦夫 1997 対人関係における外向性の直接的効果について 聖泉論叢, **5**, 63-76.
- 水野邦夫 1998 関係初期の好感度に及ぼす行動特性・社会的スキルの効果 日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 220-221.
- 大橋正夫・平林 進・小川 浩・鹿内啓子・林 文俊・吉田俊和・津村俊充 1978 女子大学生における対人認知と対人関係に関する追跡的研究 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **25**, 57-78.
- Rosenberg, M. J. & Hovland, C. I. 1960 Cognitive, affective, and behavioral components of attitudes. In M. J. Rosenberg, C. I. Hovland, W. J. McGuire, R. P.

- Abelson, & J. W. Brehm(Eds.) *Attitude organization and change*. New Haven : Yale University Press. Pp. 1-14.
- Regen, D. T., Straus, E., & Fazio, R. 1974 Liking and the attribution process. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 385-397.
- 齋藤 勇 1980 対人関係理解のための感情傾向分類の一試み 立正大学教養部紀要, **14**, 1-14.
- 戸狩正人 1977 対人関係の研究(1)－ I C L 性格評定表の作成－ 愛媛大学教育学部紀要 第 I 部 教育科学, **23**, 41-56.
- Wiggins, J. S. 1979 A psychological taxonomy of trait - descriptive terms : The interpersonal domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 395-412.